

大豆のホソヘリカメムシが多い

～収穫期の子実被害に注意～

1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

- 1) ホソヘリカメムシ(図-1)の加害期間は、大豆の若莢が着きはじめる頃から莢が黄熟する頃までにわたる。加害時期によって落莢、不稔粒、板莢や歪曲、変色粒などの被害をもたらす(図-2、3)、近年の子実被害は増加傾向にある(図-4)。
- 2) 秋田市予察ほのホソヘリカメムシフェロモントラップにおける、7月の総誘殺数は33頭(平年11.3頭)が多かった(図-5)。
- 3) 8月4日に仙台管区気象台から発表された東北地方1か月予報によると、向こう1か月の気温は高いと予報されている。
- 4) 以上のことから、今後のホソヘリカメムシの加害活動が活発になり、子実被害が多くなると予想される。

2. 防除対策

- 1) 表-1を参考に8月中旬～下旬に薬剤防除を行う。
- 2) 薬剤は莢によく付着するように散布する。



図-1
ホソヘリカメムシ成虫(左)
と幼虫(右)



図-2 不稔となった被害粒



図-3 吸汁による被害粒

3. 資料

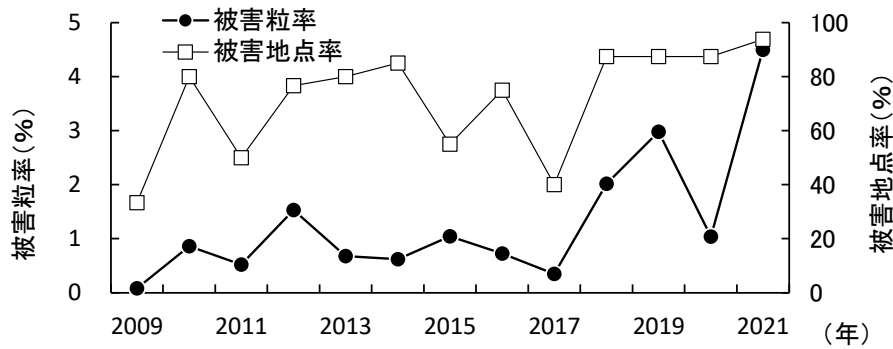


図-4 巡回調査(子実)における被害粒率と被害地点率の年次推移

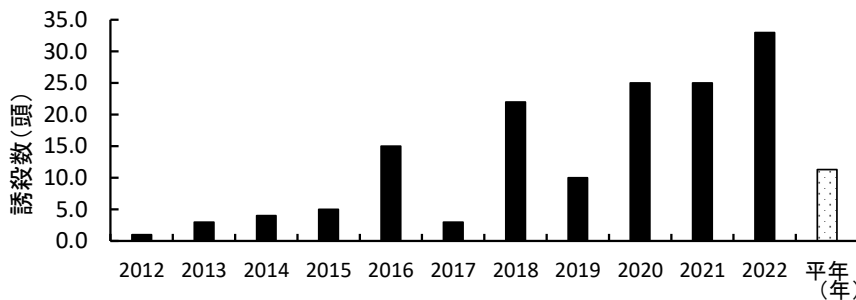


図-5 秋田市予察ほのフェロモントラップにおける7月の誘殺数

表-1 防除薬剤

散布方法	RACコード	農薬名	使用量又は希釈倍率[散布液量]		散布時期
地上散布	3A	トレボン粉剤DL	4kg/10a		8月中旬～下旬 (1～2回)
	3A	アグロスリン乳剤	2,000倍	150～300L/10a	
	1B	エルサン乳剤	1,000倍		
	1B	スミチオン乳剤	1,000倍		
	3A	トレボンEW	1,000倍		
	3A	トレボン乳剤	1,000倍		
	3A・1B	パーマチオン水和剤	2,000～3,000倍		
無人航空機	1B	スミチオン乳剤	8倍	0.8L/10a	
	3A	トレボンエア	8倍		
	3A	トレボンスカイMC	8～16倍		

(1) 注意事項

- ① 地上散布剤のアグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤の8月下旬散布はマメシクイガにも有効である。
- ② マメシクイガなど他害虫との体系防除を実施する際は農薬の総使用回数に注意する。

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660
 秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326
 掲載HP <https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>